4/17/2013

日本・アジアのキリスト教――無教会キリスト教の系譜（1）

芦名定道

＜前回＞オリエンテーション

演習日（前期）：4/10, 17, 24, 5/1, 15, 22, 29, 6/5, 12, 19, 26, 7/3, 10, 17, 24

場所：８演（→キリスト教学研究室？）

・4/10：オリエンテーション（本日）

・4/17：講義「キリスト教の平和思想・戦争論」＋担当者確定、テキストの配付

・演習は 4/24 より開始。

・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。

・必要な解説を行う（芦名）。

・成績はゼミでの発表（少なくとも前期後期一回ずつ）によって評価する。

＜テキスト＞

・前期：『内村鑑三選集２　非戦論』岩波書店。

宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978年。

・後期：後日説明

キリスト教の平和思想・戦争論

（1）キリスト教の理念と平和

１．イエスの宗教運動

運動の理念としての絶対平和主義。旧約聖書の預言者の思想の展開。

しかし、争いごと一般が単純に否定されているかは問題が残る。少なくとも、イエスの宗教運動が様々な軋轢・対立を生み出すことは前提とされていた。

２．パウロの政治思想

皇帝の下にある国家の秩序の意味、行政官の権威について、パウロは肯定的に理解している。→　キリスト教の政治思想の原型

ローマ市民としてのパウロ、ローマ帝国による全面的な迫害以前の段階

cf. ヨハネ黙示録

（2）古代キリスト教（国教化以前）

３．キリスト教徒が軍人・兵士になることを否定する議論。　平和主義？

４．古代のキリスト教思想における軍隊的な隠喩

「13:12 夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。」（ローマの信徒への手紙）

５．軍隊における偶像崇拝・皇帝礼拝

（3）国教化と正戦論

６．天上の秩序と地上の秩序の相補性・照応性

７．戦争の正しさの議論、正しい戦争と不正な戦争との区別

アンブロシウスとアウグスティヌス：

キリスト教の軍隊の使命「軍隊の原動力は愛徳という霊の贈り物であり、その目的は天上の平和である」

二つの軍隊の類似性と相補性「祈りにおいて聖職者は、兵士のために見えざる敵を相手に戦う。戦闘において兵士は、聖職者のために目に見える野蛮人と戦う」

（4）キリスト教の二つの系譜

８．聖戦論と絶対平和主義
９．愛国とは何か？
・愛は慈悲と正義との総合である（内村鑑三）。
相手への批判を含まない愛は、愛か？
↓
正当な国家批判を含まない正戦論は正戦論たり得るか？
・「国」とは？　故郷と政府（国家）との差異。国の何を守るのか？

＜イザヤ＞ 2:4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

＜ルカ＞ 6:27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言っておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。28 悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。31 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。

12:51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。52 今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。53 父は子と、子は父と、／母は娘と、娘は母と、／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、／対立して分かれる。」

＜ローマ＞ 12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。

13:1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めに背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。

＜参考文献＞
１．Ｊ．ヘルジランド、Ｒ．Ｊ．デイリー、Ｊ．Ｐ．バーンズ
『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
２．宮田光雄　『平和の思想史的研究』創文社、『平和のハトとリヴァイアサン――聖書的象徴と現代政治』岩波書店、『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
３．Ｈ．Ｅ．テート『平和の神学――キリストの現実からの倫理』新教出版社。
４．パウル・ティリッヒ　『平和の神学―― 1938-1965』新教出版社。
５．『キリスト教平和学事典』教文館。
６．姜 尚中『愛国の作法』朝日新書。
７．小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉――戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
８．石川明人『戦争は人間的な営みである（戦争文化試論）』並木書房。
９．ウォルター・ウィンク『イエスと非暴力　第三の道』新教出版社。